

第7回 コラム集「こどもと共に育つ」

コラム集「こどもと共に育つ」の第7回目になります。こどものひろばで活動し、現在も子どもに関わっておられる方にそれぞれコラムを書いてもらっています。小学校教諭、スクールソーシャルワーカー、社会福祉士、カウンセラー、介護福祉士という様々な立場の5名の方に、日常の出来事や子どもたちを取り巻く環境などそれぞれの目線でコラムを書いてもらっていますので、ぜひご覧ください。感想等もお待ちしております。



何を書こうかな～と今までの記事を読み返していると、今年度は仕事の話を書くしかなかったのが、今回は仕事の話。特に「学級経営」について書こうと思います。

まだまだ短い教員生活ですが、「1人1人を大切に」ということは、繰り返し色んな手段で子どもたちにも伝えており、自分自身の中でとても大切にすることの一つです。1人1人得意なことも苦手なことも違う中で、勉強ができる、スポーツができる、声の大きい子だけが目立つのではなく、尊重し合える集団になればと思っています。自分の内では、クラスの中で物静かに過ごしている子が安心して過ごせる集団になればと意識しています。



最近、隣のクラスの先生から「津田さんのクラスいつも扉と窓閉まっているよね」と言われました。「確かに」と思いながら子どもたちを観察していると、みんなの前で発表が苦手だったり、大きい声を出すのが苦手な子の発表になると閉めだすことに気づきました。その子の声を聞くため、頑張りを聞くため、大切にするための子どもたちなりの配慮なのかなと勝手に想像しながらほっこりしました。

※写真は、最近のつだの生活。サッカーのヴィッセル神戸がJリーグで優勝した試合の観戦時です。



こんにちは！さとみんです。

お外で過ごしやすい季節になってきたので、休みの日は朝から公園に行くことも多くなってきた今日この頃。5歳の子どもとフィールドアスレチックに行ってきました！高所恐怖症の私は遠慮したいようなグラグラ揺れる吊り橋や、ネット遊具、ターザンロープ渡りなど、身体の使い方を考えて挑戦する種目が多かったのですが、自分でやってみる！と、どんどん挑戦していました。なかには難しくて失敗してしまう種目もあり、とても悔しそう…自分が今できていることや得意なこと、あまり得意ではないことが、少しずつ分かるようになってきて、失敗することや負けることが嫌で、僕やらない。となることも最近増えてきていたのですが、もう1回やってみる！と、今日はできるまで挑戦！！他の人がやっているのを見たり、さっきこうしてダメだったから、今度はこうしてみようと、自分なりに考えて、調整をして、やってみてを繰り返して、ついに成功！！頑張りがきいた我が子の姿に感動…なんでも先回りして教えるのではなく、子が自分で考えてやることを見守ることの重要性を学びました。ついつい早くしてほしくて急かしたり、正解だと思うものを伝えたくなるけれど、正解に早く辿り着くことだけを良しとするのではなく、子どもが沢山経験を つんでいくことができるように、しっかりと寄り添っていきたいと思った秋の休日でした。



みなさんお久しぶりです！不登校経験のある元のびのび担当であり、元スクールソーシャルワーカーのT改め、たくとです。さてさて、今回は「病む」ということについて、つらつら思いのままに書き出そうかと思います。

「病む」ってなんでしょう？人それぞれに大なり小なり生きづらさや困りごとを抱えていて、私自身、学校に行けず自己嫌悪しながら昼夜逆転していた時、当人の自覚としては病んでいるという感覚はなく、病んでい

るというよりはいっぱい悩んでいるという感覚。なんなら「体は健康で元気やし、むしろ普通やわ」と思っていました。

病むということについて、最近読んだ本に書かれていたのは、「病むことは、孤独であるということであり、自分の孤独の中核にあるものを和らげられないこと、あるいは、他の人に伝えることができないことである。」(村上靖彦,「ケアとは何か 看護・福祉で大事なこと」中公新書,p.2)」と書かれていました。

ここを読んだとき、この定義にあてはめるのであれば、病んでいたのかもしれないなと感じました。ただ、私自身は孤独ではなかったと思います。ありがたいことに周りのサポートに支えられ、多くの人がつながりを持とうとしてくれ、地元の友達とも定期的に遊んでいましたし、恵まれていたと思います。ただ、本当の意味で自身の本音や弱みを伝えることができた人は少なかったもしくは、いなかったのかもしれないと思います。周りに人がいた僕でさえ自分の孤独の中核にあるものを和らげることが難しかったのに、つながりが少ない子どもはどうなるのだろうと感じます。と、思うがままにつらつらと書き留めましたが、また続きは次回にしようと思います。



元・山科青少年活動センター（やませい）職員、現・滋賀県湖南市スクールソーシャルワーカーの上原です。前回までは、今の担当中学校で活動が浸透していくまでの経緯を書いてきましたが、今回は、現在どのように仕事をしているかご紹介したいと思います。

私は毎朝、生徒玄関前に立ち、登校してくる生徒ひとりひとりに声をかけています。その場で「ちょっと聞いて!」と家のことや友だちのことを話してくる子もいますし、登校中に故障した自転車の修理や、体調不良・ケガの対応をすることもあります。また、困っている生徒が多い数学をはじめ、家庭科や技術や音楽など、どんな教科でも出没しては、生徒たちの学習をサポートをしています。休み時間や昼休み、放課後も、校内を回りながら、生徒たちに声をかけていきます。私の存在は完全に日常に溶け込んでおり、ほとんどの時間を生徒と共に過ごしています。「面談」という形をわざわざ取らずとも、日々たくさんの「相談」に対応しています。生徒たちは私のことを「うえちゃん」と呼びます。最初の頃は「上原先生と呼びなさい」と注意する先生もいましたが、事実私は「先生」ではないので「うえちゃん」でよいのです。中学生にとって相談の敷居は非常に高く、先生には言いづらい子も多いです。「〇〇の部分はあなたもおかしい」と叱られたり、話を最後まで丁寧に聞いてもらえなかったりした経験があるからです。中学生にとって、気軽に話しかけることができる、何でも話すことができる大人が学校内に居ることだけで大きな意味があります。放っておくといじめにつながるようなトラブルの予兆や、虐待や両親の不和など家庭状況に関する情報を、私が最初に子どもたちから掴むことも少なくありません。「黒子に徹する」と間接的な支援の役割が強調されるスクールソーシャルワーカーの動き方としては異端だと思いますが、これで良いと信じて日々働いています。(つづく)



ピーちゃんです。今回は、「場」と「人の繋がり」を感じた出来事についてです。先日、私がボランティアやっていた時代の、のびのびサポーターと職員が集う会がありました。数ヶ月ぶりという方もいれば数年ぶりという方もいて、皆さんの近況を聞く度に懐かしい気持ちと驚きでいっぱいでした。あと、様々な職種の話聞いて勉強になりました。みなさん、やっぱすごい。私たちの代は、活動以外の場で集まったことは今までで1回しか無い(仲が悪かった訳ではなく、活動とプライベートは完全に切り分けていたんだと思います笑)のですが、数年たってもこうやって集まろうと声をかけられるとかなり多くのメンバーが集まる現象は不思議だな～と思います。ですが、ある意味この距離感だからこそ安心出来る居場所になっているのかなとも感じます。離れたとしてもこうやって集まれる場と関係性の大切さを感じた出来事でした。(写真はその日のお昼に食べたカレーです)

